下、それより二棧敷分散して、その日も又本の松原となせり、内々には諸方の名物をも召上らるべきとの取沙汰あれども、そのさたにも不及、十日計も茶湯仕べきともいへども、其日計なれば、多く見物をせし人もなかりし、

〔晴豐卿記〕天正十九年閏正月五日、明日上杉茶湯ニ可來之由候間、用意申付候也、さう〳〵あと取みだし申候事候也、　六日、早天ト申候へ共、上杉余醉にて晝被來候、茶湯上杉なを江山城兩人、ひろ間にて千坂其外十五人、しやう伴ニ高岡出雲守、五りやうの別當など、さけのあいて也、賀茂松下民部少輔よび申候、まり一人けさせ見せ申候へば、中々きもをつぶし被申候、大さけにて立歸りの事也、

〔時慶卿記〕文祿二年十二月十四日、從施藥院明後日十六ニ茶ヲ約束候、同心之趣返答、久我右衞門督ト三人也、〇中略藥院へ一禮ニ人ヲ遣、　十五日、久我ヨリ預使者候、明日同道ノ義被語候、又此方ヨリモ以使者申入、右衞門督へモ遣候、　十六日、早天、藥院ニ茶湯アリテ行、久我右衞門督ト三人也、茶ヲバ小性ニ被振、〇振下恐脫舞字候、藥院ハ太閤ヨリ被召テ大坂へ下向也、禮ニハ以使者申候、

〔太閤記十五〕大明之使於船入之地秀吉公催船遊事

二人の勅使、〇明使謝用梓、徐一貫、并蘇西堂船中にて御約束し給ひ、翌日六月〇文祿三年十日の朝、山里におゐて御茶給りぬ、露地には色々の菜園などもあり、ふもとの里をのづから物ふりて、諸木枝をつらね、岩つたふながれもいとすゞしく、山里の名に應じ、そのさまつきぬ、

一四疊半之御數寄屋飾之次第

一玉磵歸帆之繪　　一細口之花入　　一新田肩衝

棚之飾

一茄子之茶入　内赤之盆に在　一臺天目　　一釜